

染色物における変退色堅ろう度の客観的評価について
 京工織大工芸 寺圭一成 ○佐藤哲也
 奈良佐保女短大家政 中村妙子

目的 染色物の変退色に因する堅ろう度の評価は、灰色色票系列から成る、変退色用グレースケールを用いて、視感的に対比判定する方法しかないので、判定者の主観を完全に排除することはできないので、その評価は客観性を欠いている。この判定を客観化するため、色濃度値 C^* を用いて、変退色用グレースケールを解析し、グレースケールの色濃度値式を求め、これから変退色堅ろう度等級値の計算式を誘導した。この計算式の妥当性を、視感等級値の実状調査と比較して検証した。

方法 分散染料を用いて、淡色から濃色に到る6段階の色濃度水準で染色したポリエステル繊維布を、カーボンアーク型退色試験機にかけて、40 hrs から320 hrs の範囲の照射を行ったものを、視感判定と計測のための基本試料とし、公設工業試験所で、堅ろう度判定の業務を担当する7人の判定者グループによって、変退色用グレースケールと比較して、視感等級値を求めた。また、別途、これらの試料の退色前後の測色値から、計算式による計測等級値を求め、両者を比較解析した。

結果 専内家集団による行われたにも拘わらず、視感判定値は、著しいバラツキをみせており、現在の判定方式の不確かさを示している。計測等級値と視感等級値の比較では、前者がきびしい判定値を与えたが、全体的に相関性は良好であって、計算式の妥当性を示した。特に、中色付近の色濃度水準の試料において、また、変退色量の多い試料において、両者がよく一致する傾向を示しているのは、変退色用グレースケールが、中色から両極まる、ただ1本の系列しか与えていないことの問題があると考えられる。